

エピソード72

自然災害が起こり、子どもが登校をしづむることが多くなっています…



このエピソードでは、教職
経験25年目 40歳代女性の
先生の経験を紹介します。

なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験
があります。



この先生は、地震による自然災害を経験されたそうです。

大震災が発生。震源地から近く、立っていることができず、揺れがおさまるのを待ち、停電のため、懐中電灯と眼鏡を探しました。部屋を見渡すと、家具がすべて倒れ、一部屋は入れない状態です。学校へ行くと、我が家と同様の状態でした。

震災発生時は、自分の生活をキープするため必死でした。余震も続いており、夜は何度も目を覚まし身構える状態が続きました。自分の住んでいる場所は、避難指示からはかろうじて免れましたが、夜寝る以外は、学校で過ごしていました。

1週間は、安否確認、自分の家や学校の修復に追われ、自分の生活を維持するのがやっとでした。食事やお風呂、ガスなど見通しがたってきた頃に、これからどのように児童に接したらいいのか分からずに不安になりました。

数日後、スクールカウンセラーが来校してくださり、支援の方向性を提示してくれた事で、被災者から支援者へとスイッチを切り替えることができました。

子どもたち、そして保護者にも、「眠れない」「いつ地震がくるかわからない」「地震がこわい」「皮膚が炎症し剥がれてく」等、様々な症状が現れていました。

「地震でそのような症状が出るのは当たり前的事」「地震が落ち着くとその症状はおさまっていく事」「登校時や勉強中、家で地震が起きた時の対応」などを子どもたちに伝え見守りました。

登校しぶりがあった5年生の夏樹くんは、さらに登校することが難しくなり、なかなか学校に足を運ぶことが出来なくなりました。

緊急支援（全体）は、約2か月ほど続けて行われ、継続支援（個別）へと移行していきました。夏樹くんは、この継続支援でスクールカウンセラーと半年間継続して相談を受けることになりました。

保護者さんにとって、家の片づけ、そして、同じく被災した保護者さんの実家の片づけをしながら、夏樹くんと学校へ相談に来ることは身体的な負担と心配、不安でぎりぎりの状況だったとみて取れました。

その中で、相談を継続されたことは、ほんとにすごいことだと思いました。夏樹くんのことを思う保護者さんの気持ちの強さを感じました。

夏樹くんは6年生になると登校できるようになり、みんなと一緒に卒業していきました。



なみちゃんの一言

- 先生は、誰もが不安の中で行われる子どもへの支援であったが、たくさんの支えの中、手探りのところもありながら進めることができたと話してくれました。
- 是非、多くの人に考えて欲しいと願いお話を聞かせてくれました。

お・し・ま・い



なみちゃん

ナレーション 浪岡美保
(北海道教育大学大学院 修了生)

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)